

資料 星野敏男（明治大学）中教審分科会内「青少年の体験活動の推進の在り方に関する部会 第7回」2012/03/05

＝本資料は、日本野外教育学会（2011年大会）シンポジウム用に星野が作成した資料を基にしています＝
（野外教育 Outdoor Education とは）

「野外教育とは何か」については、広範な解釈が可能な分、今日まで明確で一義的な定義がなされずにきている。

これまでの50～60年間、多くの研究者により、さまざまな定義と解釈の試みがなされている。

Outdoor Education（野外教育）は、アメリカでは、キャンプ教育からスタートし、学校教育のカリキュラム内容を充実させるための一方法であるとか、学習を進めていく上でのアプローチの一つとして学校教育と深く関連した用語として考えられてきた。

school camping	→ outdoor education →	outdoor education
camping education		environmental education
school-in-the wood		conservation education
resident outdoor education		adventure education
outdoor recreation		experiential education

George W. Donaldson outdoor education is education in, about, and for the outdoors.

このドナルドソンの定義は野外教育の行なわれる場所（in）とその扱う内容（about）、目的（for）を最も簡潔に表しているものとして、広く使われてきている。基本的には、野外教育とは（単に自然の中だけの教育ではなく）学校の教室以外で行なわれる全ての教育を指しており、自然環境の豊富な場所はもとより、動植物園や公園、博物館や水族館から工場まであらゆる場所が含まれている。

Lloyd .B. Sharp (L.B.シャープ)

That which ought and can best be taught inside the schoolrooms should there be taught,
 and that which can best be learned through experience dealing directly with native
 materials and life situations outside the school should there be learned.

・・・教室の中でより良く教えることができることは教室内で、学校外（教室外でのさまざまな状況）で直接体験を通してより良く学べることは、学校の外（教室外）で学ばれるべきである。

D. R. Hammerman (ハンマーマン)

・・・野外教育は、「教室の外や戸外（out-of-door）での体験型教育」を行うときに、それぞれの立場の人が、その教育（の内容や手法）をどう解釈しているか（考えているか）によって、その捉えられ方は千差万別である。自然保護系の人々、レクリエーション系、体育系の人々、学校教員や理科系の教員 福祉系の人々など、それぞれ「野外教育」の意味や用いられ方は当然違ってくる。（Teaching in the outdoors より）

Betty van der Smissen (ヴァンダースミッセン) （第一回日本野外教育学会時の講演から意識）

・・・野外教育の今後の課題としては、3つ挙げられる。一つは、野外教育は自然環境に関する教育と人間の成長発達をめざした野外場面の活用という両方の目標を設定しなければならない。現在の環境危機に際して、私たちは環境学習に重きを置く傾向にあるが、（野外教育が持っている）人間（特に青少年）の成長や発達に対する価値をもっと考慮していくべきだと考えている。但し、特定の目標に対しては、それに対応したプログラム展開が必要で、それがなければ効果を見ることはできない。発育発達段階に応じた目標設定とプログラム開発の研究が必要である。二つ目は、野外体験の意味についての研究が求められる。感覚的に野外教育の良さをわかるだけでなく、（心理学や社会学、生理学などの）さまざまな学問の手を借りながら野外（野外教育）を効果的な教育手段にしている要素は何であるかを解明していく必要がある。3つ目は、野外教育独自の教育方法についての研究が必要。我々は教室内の手法をそのまま野外に移行させることはできないので、（野外教育特有の）効果的な教育方法を研究開発しなければならない。

Clifford E. Knapp (クリフ ナップ) (1999年秋、日本を訪れた時に開かれた会で、アメリカの約60個の野外教育関連用語を紹介しながら、環境教育と冒険教育の考え方について触れたときのコメント)

「・・・野外教育にしる、環境教育にしる、概念モデル(バンダースミッセンも用いた Yapple, Charles(ヤプル チャールズ)の野外教育と環境教育の関係図を用いながら)を作ると言うことは一筋縄では行かない仕事です。この世の中で誰一人として、野外教育とは何かを完璧に定義できる人は存在しないと考えます」「野外教育と環境教育のふたつを融合させた outdoor・environmental education (野外・環境教育) という言い方でくくってしまってもいいんじゃないか、と私は思っていますが・・・」とも述べられた。

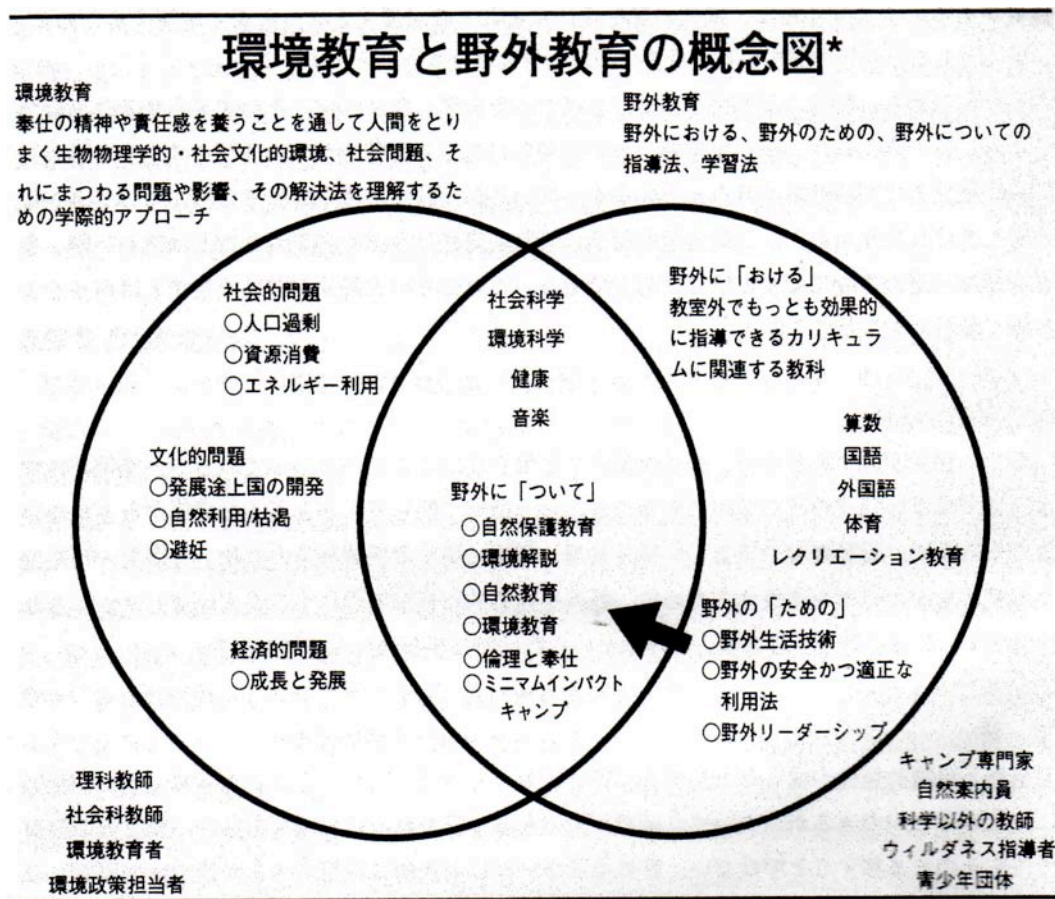
ナップ氏はまた、「・・・いま環境教育はとても大事だが、あくまでも子どもたちの成長、人間的成長が第一優先の教育であるべきだ」とも述べ、(人間の成長に寄与するような) humanizing environmental Education の用語をよく用いた。1985年に出版した彼の著書のタイトル名にも使われている。

James Neill (ジェーム スニール氏 野外教育や冒険教育など、多くの定義や考え方を HP 上で紹介している)

outdoor education is... a term that means different things to different people, cultures, and organizations. Common themes include an emphasis on direct experience of the outdoors for personal, social, educational, therapeutic and environmental goals.

環境教育と野外教育の概念図

(第1回 日本野外教育学会時にバンダースミッセン博士が資料として用いた図)



出典：ヤプル・チャールズ「環境教育と野外教育を描く」
Taproot10巻4号、1997年5月、111頁(野外教育連合)

図1 「野外教育の木」 場としての野外

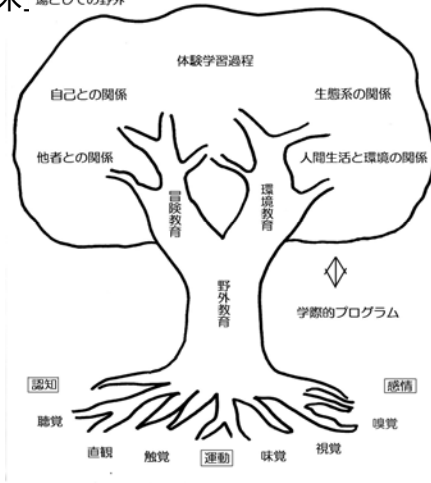


図1. Priest(1986) が描いた「野外教育の木」野外教育・環境教育・冒険教育の関連を木のモデルを用いて表現している。「野外教育には、冒険教育と環境教育の2つの大きな枝があり、その枝には体験学習過程という葉が生い茂っている。野外教育の木は、太陽（野外の場）と土壌である六感（視覚、聴覚、味覚、嗅覚、触覚、直覚）や3

つの学習領域（認知、感情、行動）からの養分を吸い上げどちらの枝を登ろうとも体験学習過程を通し、4つの関係（自然と人の関係、生態系間の関係、他者と自己の関係、自分自身との関係）の理解が得られることを意味している。

図2 「野外教育の傘」

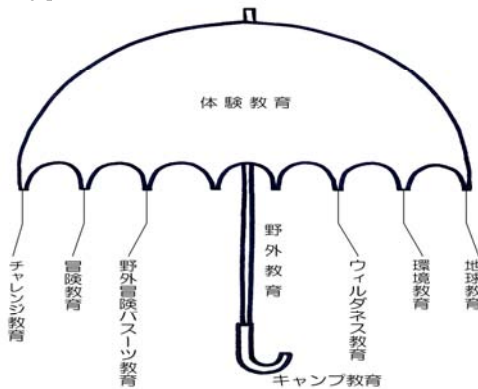


図2. Bisson(1998) が描いた「野外教育の傘」の図 この図は、野外教育用語の氾濫を指摘し、傘の比喻を用いたモデルでそれらの用語の関連を整理した図である。この図を論文の中で紹介した岡村泰斗氏は以下のように解説している「傘の枝の部分が野外教育を表している。枝から8本の傘の骨が出ており、そのうちの3本の骨（アウトドア冒険パスーツ教育 Outdoor Adventure Pursuits Education 冒険教育 チャレンジ教育）は、主に自己の発展に焦点を当

てたものであり、別の3本の骨（地球教育、環境教育、ウィルダネス教育）は、環境倫理に焦点を当てたものである。傘の布の部分は体験教育を表し、すべてに共通した教育の方法であることを表現している。」と述べ、「これら（図①、図②）の概念モデルはいずれも、野外教育には、環境教育と冒険教育の2つの大きな柱があり、「体験教育という学習方法」(The Experiential Learning process) をとって行われることを表している。また自然環境の中で行われる野外教育は、意図するしないに関わらず、環境教育的要素と冒険教育的要素を含み、いずれも欠くことができないものである。」

日本で使われている野外教育の定義 平成8年の文科省報告書「青少年の野外教育の充実について」この報告書の中の解説文で「野外教育とは、自然の中で組織的、計画的に、一定の教育目標を持って行われる自然体験活動の総称」として、自然体験活動という用語も用いられた。

さらにこの報告書では「自然体験活動とは、自然の中で、自然を活用して行われる各種活動であり、具体的には、キャンプ、ハイキング、スキー、カヌーといった野外活動、動植物や星の観察といった自然・環境学習活動、自然物を使った工作や自然の中での音楽会といった文化・芸術活動などを含んだ総合的な活動である。したがって、野外教育は、自然体験活動を取り扱う教育領域であると位置付けることもできる。」とも定義づけた。

日本で行なわれているさまざまな野外教育的な活動（冒険教育や環境教育含む）をドナルドソンの定義 outdoor education is education in, about, and for the outdoors.になぞらえ、野外教育の行なわれる場所(in)とその扱う内容(about)、目的(for)に大別すると、おおむね次の五つに分けて考えることができる。

- (1) 体験を通して五感に直接働きかける「野外における教育」
- (2) 共同生活やさまざまな活動で個人をのばすような「野外を用いての教育」
- (3) 教科にこだわらず自然について総合的に学ぶ「野外についての教育」
- (4) 人間と自然との望ましい関係やあり方について学ぶ「野外を理解し守るための教育」
- (5) 野外を楽しむ技術を学ぶ「野外を有効に利用するための教育」

日本の野外教育の発端 井村 仁 先生（筑波大学）「・・・日本では、1923年（大正12年）に『日本アルプスと林間学校』という書物の中で鶴飼盈治氏が野外教育という用語を用いている。これはアメリカでOutdoor Educationという用語がL. B. sharpにより広められていく20年も前のことである。・・・鶴飼の言う野外教育の内容は現代の野外教育に通じる内容である」また、井村氏の別の歴史的研究論文では、「日本の野外教育の源流は日本の山岳信仰から生まれた修験道にその源流があり、修験道は、野外教育の二大要素である冒険教育と環境教育の双方の内容を備えている」と指摘した。

野外教育では何を学ぶのか？（野外教育の場の特性の解釈例）

図3. 構造として見た野外教育

（野外教育）	
「教室の中での教育」	「教室の外での教育」
（形式知・科学的知）	（暗黙知）
知識	理解
客観的	主観的
間接体験	直接体験
科学	芸術・宗教
ロゴス	パトス
論理・文字・記号	イメージ・感性
左脳・大脳新皮質	右脳・大脳辺縁系
IQ	EQ
よく学ぶ	よく遊べ
理性	感情
デジタル	アナログ
人工	自然
経験	体験

筆者（星野）が描いたこの図は、野外教育が教育として扱おうとしている諸々の対象を「教科書で教えやすいものと、体験を通さないと教えるにくいもの（教科書では教えるにくいもの）との相同関係にある代表的なものを対立項としてあげ、この両者の背後にある深層構造を「知」や「教育」の視点から見えていくと、この関係は、哲学で言う「形式知と暗黙知」あるいは、いわゆる「客観的知と主観的知」「科学的知と内省的知」などの知の二項関係でとらえることができるとし、野外教育ではこの暗黙知的な知（身体知やクオリアと表現されることもある）を扱い、体験的な学習方法や「ふりかえり」などを通して個人的な体験を通して得られたことをいわゆる学習されたもの（経験）へと変換する行為を通して（図の左側の世界への橋渡しをすることで）言葉や共有された知識として学べるものにしていくと解説した。野外教育は「体験を学びに発展させるきわめてバランスのとれた有効な手法」である。

高等教育や大学での授業科目として野外教育を見た場合

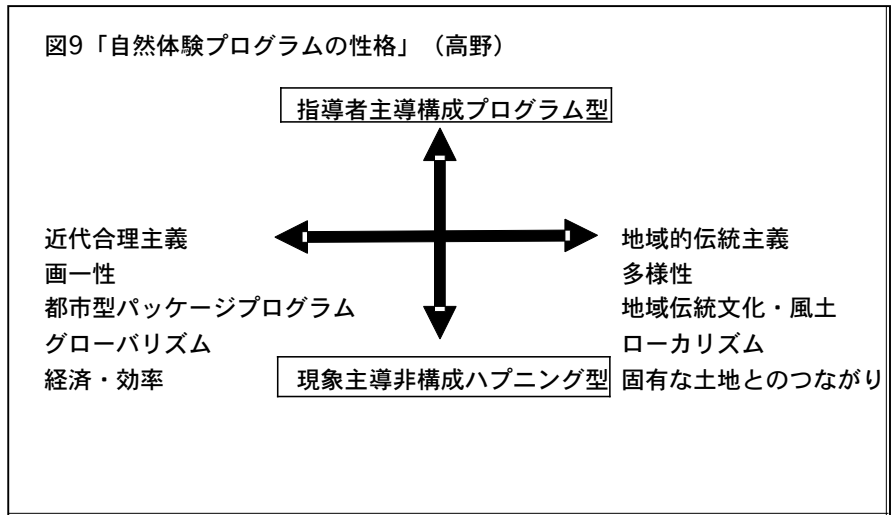
文科省が定める「人材養成と学位授与方針」に基づいたカリキュラムの位置づけが必要となり、科目としての野外教育独自の到達目標や固有性を討議することが必要となる。

野外教育の「関心・意欲・態度」「思考・判断・表現」「知識・理解」とはどのようなものか。

「知識・理解」「汎用的技能」「態度・志向性」「総合的な学習経験と創造的思考力」には野外教育のどのような能力や学習があてはまるのか。野外教育独自の「観点別評価」とは何か？野外教育独自の「学士力」とは何か？などについても検討し精査していかねばならないだろう。

野外教育の教育手法の特徴 (図 高野孝子氏)

引用= 平成17年度「青少年の都市と農山漁村の交流活動推進に関する調査研究事業」報告書より=



図は、高野孝子氏が描いた図で、自然体験プログラムなど現場で行われる(野外教育的な)プログラムと指導内容がある程度確立されているいわゆるパッケージプログラムとの違いについて言及している。(以下、解説、高野孝子氏 ※は、筆者コメント)「・・・日本では近年、普遍的な性格を迫及した合理的なパッケージプログラムから、固有の土地とのつながりに注目した多

様の地域文化性を重視する自然体験の捉え方が唱えられている。手法もしくはスタイルとして、「指導者主導構成プログラム型」と「現象主導非構成ハプニング型」がある。「指導者主導構成プログラム型」とは、目的や内容、手順をあらかじめ決めておき、指導者が進めていくことができるもので、必要な時間や成果がある程度読める。指導経験が浅くても実施可能。(※ 教室内で用いられるある程度手順が決まった教授方法にも近い手法である。)一方、「現象主導非構成ハプニング型」は、自然の中で起こるハプニングを学びの教材とし、予定や反復はできず成果も予測できない。熟練指導者向け。自然観察と言われるものはハプニング重視であることが多い。通常は「指導者主導構成プログラム型」が一般的で、パッケージプログラムはほとんどがこれに属する。自然体験プログラム全体では、この両者を組み合わせるものが見られるようになっている。

小森伸一氏(東京学芸大学)が描いた野外教育の「基本構成要素図」(野外教育の理論と実践より)

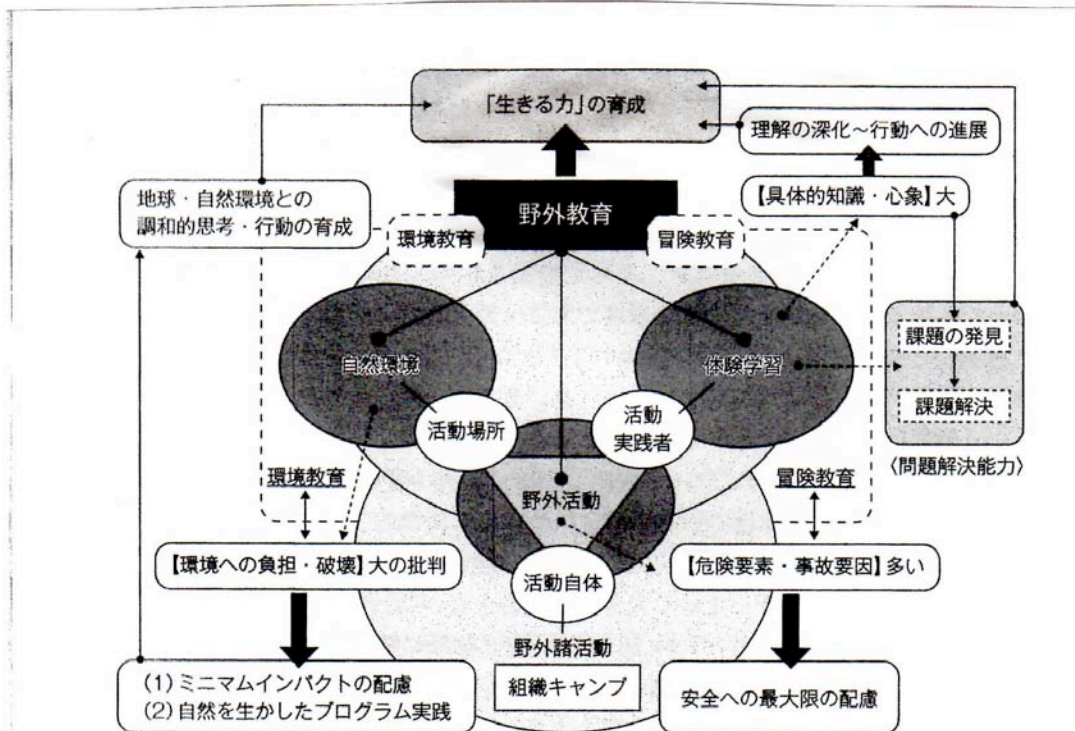


図2 野外教育の「基本構成要素」および関連重要項目の相関図

「野外活動」

日本では、戦後、野外活動という用語が広く使われるようになった。それには、昭和36年に制定されたスポーツ振興法の影響が大きいと思われる。スポーツ振興法の中では、以下のように定められている。

スポーツ振興法より（一部分を抜粋） 第二条；「この法律において「スポーツ」とは、運動競技及び身体運動（キャンプ活動その他の野外活動を含む。）であつて、心身の健全な発達を図るためにされるものをいう。

（・・・中略・・・） 第十条；「国及び地方公共団体は、心身の健全な発達のために行なわれる徒歩旅行、自転車旅行、キャンプ活動その他の野外活動を普及奨励するため、コースの設定、キャンプ場の開発その他の必要な措置を講ずるよう努めなければならない」

この法律の中では、野外活動の具体例として、キャンプやサイクリング、ホステリングなどが具体的に野外活動としてあげられている。つまり当初は、スポーツを振興するための方策としての野外活動であった。このスポーツ振興法の解説文では「野外活動は、形式の整ったスポーツを除き、主として、自然を相手とした広々とした屋外で行なわれるレクリエーションあるいは、体育活動を指している」とされており、昭和30年代当時は、野外活動は主に青少年を対象に教育を目的として行なわれる自然の中での身体活動を中心とするものとして理解されていたことがうかがえる。

なお、条文解説の中で、その他の野外活動としては、登山、遊泳、スキー、スケートがあげられている。

この条項が契機となり各地に一気に野外活動に関する施設の整備がすすめられ、さまざまな野外活動が普及することとなった。その反面（おそらく、この条項の縛りの影響から）行政上は、キャンプなど、多くの自然環境で行われる活動は「野外活動の一部-」であり、野外活動は「身体運動としてのスポーツの一部-」として扱われることが多かった。その具体例として、（社）日本キャンプ協会や（財）日本サイクリング協会、（財）日本ユースホステル協会等は、文部省・体育局（当時）が主管庁となっている。（現在は、文部科学省スポーツ・青少年局）

これらの影響もあり、日本の学校教育現場等で行われてきた林間学校やキャンプ教室、スキー等の野外での活動は、我が国ではどちらかというと体育関係の中で広まることとなり、その活動内容も身体運動的なものが多く取り入れられることとなっていった。

「野外教育」と「自然体験活動」の用語

当初は、青少年教育の目的や教育目標を達成するための手段として行われていた野外活動であったが、青少年への活動の振興のため、活動そのものが目的になる傾向もあり、やがて、1970年代に入り日本でも自然環境への意識が高まると、自然環境の中、大勢で行われる体育的、スポーツ的な野外活動に対しては、自然環境への配慮や喧噪・騒音、踏圧問題などから批判が加えられることも多くなった。これらの反省もあり、本来教育の手段としての野外活動であったことから野外教育という用語もこの頃からよく用いられるようになった。

平成8年（1996年）に「青少年の野外教育の充実について」という報告書が文科省に出され、いわゆる公文として初めて「野外教育」という用語が使われ、その後、野外教育という用語も広く使われるようになっていった。この報告書の中の解説文で「野外教育とは、自然の中で組織的、計画的に、一定の教育目標を持って行われる自然体験活動の総称」であるとして、自然体験活動という用語も用いられた。

さらにこの報告書では「自然体験活動とは、自然の中で、自然を活用して行われる各種活動であり、具体的には、キャンプ、ハイキング、スキー、カヌーといった野外活動、動植物や星の観察といった自然・環境学習活動、自然物を使った工作や自然の中での音楽会といった文化・芸術活動などを含んだ総合的な活動である。したがって、野外教育は、自然体験活動を取り扱う教育領域であると位置付けることもできる。」とも定義づけた。この報告書の影響もあり、野外教育とともに自然体験活動も親しみやすい用語として広く使われるようになっていった。また、野外教育全国フォーラムや企画担当者セミナーなど、全国的な協議会や研修会が開催されるようになった。

戦後の日本では、キャンプなどのいわゆる野外活動は多くは、YMCA や YWCA、ボーイスカウト、ガールスカウト、レクリエーション協会やキャンプ協会など、いわゆる青少年育成団体が中心になって進めてきたが、1980 年代に入ると、いわゆる民間自然学校があちこちで独立しはじめた。これらの団体では、これまでの身体的な野外活動とは違った視点での野外活動や環境教育的な視点を持った活動を自然学校として行い、また、いわゆる体験学習法という手法で指導を行うなど、それまでの野外活動とは違った内容、指導法での体験活動を行い、その多くの活動を自然体験活動と称して行っていった。その後も自然学校の設立が続き、1996 年には「自然学校宣言」シンポジウムが開催されたことをきっかけに更にその活動が広まり、このネットワークの形成がやがて自然体験活動推進協議会設立へと発展していった。自然体験活動という用語と 1980 年代以降の民間自然学校の設立は深く連動しているように思われる。

野外教育にかかわる用語のあれこれ（以下は、厳密な分類ではありません）

1) 教育領域の用語、あるいは、教育系用語として用いられているもの

野外教育 ・ 野外活動 ・ 環境教育 ・ 冒険教育 ・ 体験教育 ・ 自然教育 ・ 経験主義教育

2) 自然の中での活動の形態や内容を表す用語

野外運動 ・ 自然体験活動 ・ アウトドアパスーツ ・ アウトドアスポーツ ・ 野外スポーツ

3) 余暇活動やレジャーなどの領域でおもに用いられる用語

アウトドアレジャー ・ アウトドアレクリエーション ・ 野外レクリエーション

4) グループワークやコミュニケーション活動、冒険活動などの指導場面でよく用いられる用語

体験学習法・ファシリテーション・プロセッシング ・ カウンセリング、ふりかえり、分かち合い

5) 学校教育との関連で用いられる

生きる力・ゆとり・総合的な学習の時間・体験学習・セカンドスクール・食農教育

6) 整った形式をもつプログラムを表す用語

地球教育（アースエデュケーション）・ネイチャーゲーム・ネイチャーエクスペリアリング
・プロジェクトアドベンチャー(PA) ・プロジェクトワイルド (PLT) ・(PLT) ・オービス (OBIS
:Outdoor Biology Instructional Strategies) ・アイオレシート・ジェムズ (GEMS) など

7) 観光活動やその形態を表す用語

エコツーリズム ・ グリーンツーリズム

8) その他 関連する用語など

・ リスクマネジメント・安全教育・自立支援・子どもゆめ基金・自然学校・指定管理者制度
・ 居場所作り・LOHAS ・ 持続可能な社会 ・ ニート・総合型地域スポーツクラブなど

活動用語と行政のかかわりについて

野外活動と野外教育、自然体験活動の違いを行政的な視点から眺めてみると、活動形態は似通っていても、それが助成金の対象や振興政策の対象とする場合には、異なった扱いとなることが今でも多い。たとえば、「野外活動」は、1961 年制定のスポーツ振興法で当初規定したので、当時は文部省体育局生涯スポーツ課（当時）の管轄となり、野外教育とよばれば、同じ文部省でも生涯学習局青少年教育課（当時）の管轄対象範囲となった。同じようなことは、農林水産省、環境省、林野庁、国土交通省、厚生労働省等についてもいえる。近年では、それぞれの省庁において同じような内容の活動、たとえば、自然体験活動などについては、それぞれの省庁をまたがった連携事業も盛んに行われるようになってきている。これらの連携事業がさらに発展されることが期待されている。

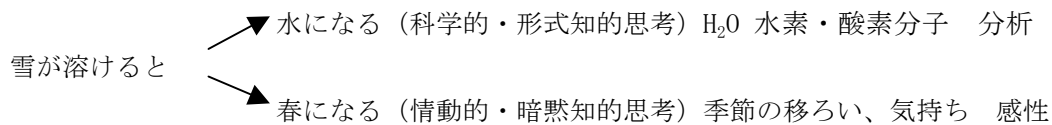
(要点の補足と概要 自然体験活動や野外教育を中心として)

1. 構造として見た野外教育の特質

「教室の中での教育」	(野外教育) 「教室の外での教育」
知識	理解
理性 客観的	主観的 感情
間接体験	直接体験
科学 ロゴス	芸術・宗教 パトス
論理・文字・記号	イメージ・感性
左脳・大脳新皮質	右脳・大脳辺縁系
デジタル IQ	アナログ EQ
よく学び	よく遊べ
人工	自然
経験	体験
(形式知・科学的知)	(暗黙知)

自然体験活動などを野外教育として実施する場合は、左の図を、2項対立的に捉えるのではなく、それぞれの要素が、多いか少ないか、つまり、グラデーションの関係になっていると考えた方がよい。さらに言うなら、両者の連携がとれるような指導ができれば、学校教育のカリキュラムとも密接な関係が生じてくる。体験を通して、なおかつ科学的な知を身につけさせることが理想的な指導となるであろう。野外教育は、現代社会や現代の学校教育、家庭、地域社会で失われつつある人間性のバランスを回復させる作用をもっている。ヒトが人間として成長していくためには、図の左右二つをバランスよく発達させていくことが求められる。ただし、両者を乖離させるとマイナスとなろう。

2. 構造図からみる野外教育（自然体験活動）の本質



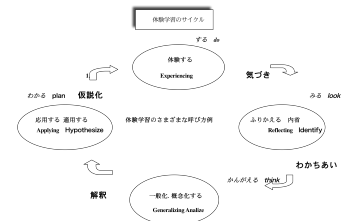
情報化やグローバル化、バーチャルリアリティーの優勢な現代では、直接体験することを軽視しがちになり、それがさまざまな現代青少年の社会問題を引き起こす引き金となることもある。体験し、気づき、行動していくためには価値を感じられる感性が必要である。その意味においては、野外教育は感性教育でもあるし、教科との連携で考えるとホリスティック (全体的・総合的) 教育でもある。

3. 野外教育現場の指導法 (体験学習法)

=いわゆる体験的学習サイクルを用いた指導法がよく使われている=

企業等で使われる、PDCA サイクルと同じような構造としくみ。

- 1) 体験する (DO) Experience やってみる
- 2) ふりかえる (LOOK) Identifying 指摘する 観てみる
- 3) 分析する (THINK) Analyzing 考える、
- 4) 仮説化する、(Hypothesizing) Plan or Grow 概念化する、まとめる
次を考える わかる



野外教育の現場で体験学習法がよく使われる理由：

「ふりかえり」という行為や体験を通じた学びのプロセスは、図1の構造図で見ると、体験を通して得られたきわめて個人的な知 (暗黙知) を他の人と共有化できる情報 (形式知) に変換する行為でもある。(体験場面や現場での指導では、指導者により、あるいは参加者自身も、図の左右のやりとりや行き来がいつもなされている。)

→ 「体験を学びにかえる」には、このプロセスが重要とされている。ただし、体験から何を引き出すかが重要。

体験すること、させることが目的にも手段にもなり得る。

→ 体験活動の教育効果を研究で実証することも同じ変換行為である (但し、実証がきわめて困難)

4. 野外教育 (自然体験活動) の教育的効果

=統計学的データを用いた実証的な研究でこれまで明らかにされていること (代表的な事例) =

- ①達成動機の向上 (やる気が身につきます)

- ②有能感の向上（自信がつかます）
- ③自律心の向上（がまんと責任感が身につきます）
- ④他者受容感・凝集性の向上（友だちができます）
- ⑤自己決定感の向上（ものごとを自分で判断します）
- ⑥自然意識・感性の向上（自然への気づきが身につきます）
- ⑦正義感や道徳心が身につきます 生きる力が向上します

※子どもの体験活動の実態と行動や考え方との関係、その後の人生への影響については、国立青少年教育機構が実施している調査研究（千葉大学明石先生の分析データ等）がよく知られている。詳細内容については省く。

教育的な効果の要因として挙げられていること

= 効果要因として以下のものが挙げられています =

- 1) グループで何かを成し遂げたり、解決したりする場面があること
- 2) 苦しいことや大変なことに自分でチャレンジして成功する場面があること
- 3) 自然の中で本物の自然や自然物に直に触れる機会があること
- 4) 状況を把握し、支援ができる指導者が介在すること
- 5) 仲間と一緒に生活し、暮らしをすること

5. 自然体験活動の指導の全体像と求められる能力

=指導者やリーダー（専門職員・指導員）に要求されているもの=

- 1) インストラクション（技術指導）
- 2) インタープリテーション（環境や自然の解説能力）
- 3) ファシリテーション・プロセッシング・カウンセリング（参加者のへの支援や掌握能力）
- 4) コーディネーション（地域の人的資源や関係団体との連携能力）
- 5) 企画とマネジメント能力（全体を俯瞰し、企画運営する能力）
- 6) 情報の収集、発信、ネットワーク形成力
- 7) リスクマネジメント

6. 主催側に求められるアウトドアでのリスクマネジメントの考え方など

リスクマネジメントとは、事故を予防し、安全でより質の高いプログラムを提供すること。

「危険だから、やらない、させない」ではなく、(参加者) (スタッフ) (フィールド) の3点をより安全に拡大していく。加えて、(人体の生理や心理) (保険や法律に関する知識) (自然界での危険や天候等) に関する知識・技術を身につけることで、さらに参加者のチャレンジの範囲をより広げていく。参加者がより安全に活動できる範囲と程度、スタッフ側もより安全に活動を提供できる範囲、程度、内容を深く広くとれるように準備しておく。

